

ぼくの弟

東広島市立平岩小学校

第3学年 岸野 瑛心

ぼくの弟

平岩小学校 三年 岸野 瑛心

ぼくには「ごうし」という五才の弟がいます。ごうしはいつも元気い、ぱいです。おうちよこちよいなところお、すぐいふげるところもありません。お父さんとお母さんがけんかして悪いふんいきにな、た時、わざとおどけてダンスをして、よくなか直りさせてくれます。時々けんかもするけど、なかのいい弟です。

ある日、家でごうしとい、しよに野球の試合をテレビで見えていた時のことです。せんせいのプレーを見て、「いいバッティング。いいぞ、いいぞ」と大こうふんしているといつの間にかごうしがバットをふるまねをしていました。ぼくは、

「ごうしは野球をやってみたいのかな」と思いました。

「野球、やりたいん？」

と聞くと、「ごうしはうんとうなずきました。

」じゃあ、「いいよ」にやろう。

とぼくがさそうと、

「いいよ」。

とうれしそうに答えました。ぼくは、野球の練習に気合いを入れました。

次の日から、さっそく野球の練習を始めました。ぼくがなげたボールを「ごうし」いうたせよようにしました。が、なかなかバットに当たりません。予想よりもへたくそだ。たのび、

「これは大へんだ！」

とあわてました。でも、

「まあ、はじめはこんなもんだらう。」

という気持ちにもなりました。ぼくは、「お兄ちゃんとして、ごうしの、野球をやりたい」

というねがいをかなえてやらなくてはなりません。

「ごうしがぼくのなげるボールをうちかえす

まで、あきらめないでがんばるぞ。」

と、ぼくは心にちがいました。

と、くんは毎日つづきました。何回ボールをなげても、ごうしのバットにはなかなか当たりにません。はじめのうちはいこいこしながら練習していたごうしも、だんだんつかれてきたのか、
「もううてないからやだ！」
と練習をいながら時もありました。でも、つぎの朝になると、
「今日もやるよ！」
と、けろ。とじていました。ごうしもぼくも

目ひょうをあきらめませんでした。

二週間ぐらい練習を続けたある日。いつものように、ぼくがボールをなげると……
カキーン！
なんと、ごうしがぼくの投げたボールをうちかえしたのです。

「やっ、たあ！ やっ、たあ！」

ぼくとごうしは、大よろこびでハイタッチしました。でも、たまたま当たったのがもしれないと思いつぎのボールをなげてみました。

すると、ごうしはまたうちかえしました。もう一球、もう一球とつづけてなげましたが、ごうしはつぎつぎと見事うちかえしました。ぼくは、うれしくて、うれしくて、とびはねずにはいられない気分でした。その日は、夜ねるまで、とウキウキしていました。このことをお母さんに話すと、

「すごいね。さすがお兄ちゃん。」

と言ってほめてくれました。ぼくは、お兄ちゃんとして、ごうしをも、とせい長させると

けっ意しました。

ふだんは弱虫だけど、やりたいたいと思っただけを、あきらめずがんばり続けたごうし。ごうしは、世界で一番すごい弟です。ぼくの自慢の弟です。これからも、ぼくはお兄ちゃんとして、ごうしのねがいを全部かえてやりたいです。

指導者の言葉

この作品は、国語科「話したいな、うれしかったこと」の単元で用いたスピーチ原稿をもとに、うれしかった出来事について詳しく書き表した生活作文です。

この作品を指導するにあたっては、

うれしかった出来事について、その時々の様子や思いを細かくメモする。

段落や「始め、中、終わり」といった基本的な文章構成を意識してまとめる。

自分の気持ちを豊かに表現できるような言葉を選ぶ。

という3点に留意して指導しました。

本児童は、自分の関わりによって弟を成長させたことに大きな喜びを感じ、そのことが書くことへの原動力となりました。弟が野球に興味を持ち始めたことを知ったとき、練習を始めたものの思い通りに進歩しないとき、練習の成果を感じ取ったとき等について振り返り、出来事やその時々気持ちを重ね合わせて素直に表現しています。大好きな弟への深い愛情や兄としての覚悟が伝わる、心温まる作品になりました。